
恋想い出

歩緒路李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋想い出

【Nコード】

N3568J

【作者名】

歩緒路李

【あらすじ】

高校の先輩・高梁^{たかはし} 惇^{あつし}と後輩・小林真弓^{こはやし まゆみ}の恋物語。
少し懐かしい80年代の恋愛模様。甘くもあり、切なくもあり、最後には意外な展開へ…………。

先輩と私の恋物語

「小林さん。来週の土曜日、空いてる??」

涼やかな眼で見つめながら、高校の先輩・高梁たかはし 惇あつしが言った。

「どうしてですか?」

私、小林真弓こはやし まゆみは、少し微笑みつつも、ジラすような応対をした。
た。

「土曜日、空いてれば東京デイズニerlandに行かない? 駄目かな??」

(なっ、なんて率直に言うんだらう。高梁先輩。)

顔が紅くなり、動揺する心を抑えながら、

「それは、デートのお誘いですか?」

「そうだよ。駄目??」

その涼やかな眼で、真っ直ぐ私の眼を見る。

高梁先輩とは、高校の図書委員で知り合い、先輩が3年、私は1年。当時の高梁先輩は、年上の女性と付き合っていると聞いたり、一日で二人〜三人と付き合っのが当たり前前のプレイボーイ(死語?)ぶりだった。

そんな先輩を私は、

(なんて、嫌な奴!!女の敵よ!!)
と、嫌悪感を抱いていた。

高校生活もお互いに卒業し、久しぶりに図書委員の同窓会で会い、二次会のボーリング場にて、

「土曜日、空いてる??」

と、言ってきたのだ。

「先輩は、確か年上の人とお付き合いしてませんでした?」

「ああ、高校の時ね。去年、別れて今はフリー。」

「本当に?。怪しいなあ。」

「ほっ、本当だよ。今は、彼女はいないよ。」 かなり焦って、しどろもどろな先輩。

クスッ

「あつ。俺、もしかして、からかわれてる? まいっただな。」

涼やかな眼が三日月のように優しく、微笑む。

「ごめんなさい。からかうつもりじゃないんです。なんで私を誘うのが不思議で、つい……。」

「なんで、って。可愛くていいなあ」と想って、色々考えてから、声をかけたんだよ。」

顔を真っ赤にしながら、下向にうつ向いた先輩。昔と比べて、だいぶイメージが違うのに心が揺さぶられ、私は、

「来週の土曜日、デイズニerlandへ連れてってくださいますか??」

〈続く〉

あの誘いから、一週間後。高粱先輩と、デイズニールランドへ来た。

天気は、雨。

別に迷信とか信じる訳じゃないけども、初めてのデートに雨とか降ると、その相手とは、うまくいかない．．．．．なぐりて、聞いたことあるけども、本当に雨降りとは．．．．．。

デイズニールランドの雨

憂鬱。

そんな私を気遣うように、

「小林さん。傘一本で二人入っているから、もう少し俺の方に来ないと、濡れちゃうよ。」と、私の左腕を引き寄せる。

『何だか本当に、恋人同士みたい。』

期待に胸を、ときめかせながら先輩の右腕に、私の左腕を入れてカッブルのように腕を組む。

「えっ。」先輩がたじろぐ。

「どっ、どうしたの？ 腕を組んできて。」動揺しつつも、顔は半分、嬉しそうな先輩。

「雨で濡れちゃうし、手を繋ぐのも変だから、腕を組んでみたの。

嫌なら、はずすけど．．．．。」

「いつ、嫌なことある訳ないだろう。案外、小林さんって、甘えん坊なんだな。」、顔を赤くしながら私をたしなめた。

「えへへっ」、ペロツと舌を出した私。

そして二人は、ホーンテッドマンションやカリブの海賊等を周り、待ち時間が3時間でも、高校の頃の話や車の話、本の話、家族の話 etc 話が尽きなかった。

雨は、止むことなく降り続けている。

「寒くない？」優しく話かけてくれる先輩。

「はい。大丈夫ですよ。」と、返した瞬間。

私の左手を、ギュツと握る先輩の右手。
私の方が、熟れた林檎のように顔を真っ赤にされながら二人で、デ
イズニーランドの園内を遊んだ。

午後五時。デイズニーランドの駐車場。

雨は降り続けている。

先輩の車に乗り、かなり車内が冷えてるので暖めている間、二人は
一言も話さず、ただ、何処かを見つめている。

『先輩……何か悩んでいる？ 車に乗ってから何も話さなくな
るし……どうしたんだろう？』一抹の不安が私の心に押し寄せ
る。

だいぶ長い間、雨の音と暗い中に、幾つものぼんやりとした外灯の
景色だけが静かに流れていた。

「小林さん！」

突然、名前を呼ばれて驚く私。

「はっ、はい！！！」

前だけ見ていた先輩の顔が、私の方に向き、「小林さん。俺と付き
合って下さい。」

雨のデイズニーランド その駐車場で、告白されました。

突然過ぎて、豆腐で頭を殴られた感じの衝撃で言葉が出ないのを
何とか出して、

「一分だけ待って下さい。」

〈続く〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3568j/>

恋想い出

2010年10月8日23時25分発行